

## 2023年4月16日復活節第2主日

創世記 8章 6-16 節、9章 8-16 節

使徒言行録 2章 14a, 22-32 節

ヨハネによる福音書 20章 19-31 節

先週はたくさんの方々と共に、主イエス・キリストの復活をお祝いすることができましたこと、心から感謝したいと思います。

本日の旧約日課は、「創世記」にあるノアの方舟の物語です。40日の洪水の後、ノアは箱舟からカラスを放ち、次にハトを放ちます。「地の面から水がひいたかどうかを確かめようとした」（創6:9）からです。洪水という大変な状況の中で、冷静な判断であったといえます。ただし、カラスはあまり役に立たず、ハトが役立ちました。ハトは、オリーブの葉をくわえて戻ってきて、水が引いて陸地が見えたことを告げたからです。この物語によって、ハトは、平和のシンボルになった？のかもしれませんが、この物語で重要なのはそこではありません。洪水の後、主なる神様が「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」（創6:9-11）と語られたことです。

主なる神様は、今後、水によって破滅的な世界の終わりは来ないと、告知されたのです。その告知は、これ以降、この世界を人間が自分たちの理性で、治めなければならないことをも意味しています。ただし、主なる神様が、この世界を見守ることを放棄したということではありません。また、主なる神様は、これ以降の物語においても、世界の出来事に直接介入しています（代表例：出エジプトの出来事）。しかし、主なる神様は、人間が自らの理性で判断し、この世界を神様の意志にかなったものと導くことができるように、一つの規範を与えました。それが「律法」です。

「律法」は、端的に言えば、法律です。主なる神様は、法律に基づいて善悪を判断し、世界を治めるようにと人間を導いたのです。法治国家で生活している現代の私たちの世界もそれと同じでといえますが、完全に同じではありません。「律法」は法律ですが、人間が作った法律ではなく、主なる神様が与えられた法律であり、主なる神様への信仰が大前提となっているからです。つまり、「律法」を守るためには、一般の法律と同じように理性的な解釈が必要ですが、主なる神様を信じることがなければ、「律法」を守ることはできないのです。つまり、理性を超えた信仰という事柄があって、初めて人間の理

性は「律法」に関して機能するのです。ただし、たとえ信仰的には熱心ではなくても、形として「律法」を守ることを通して、主なる神様の意思に則した歩みになる場合もあります。しかし、そのことが行き過ぎると、形だけの主なる神様との関係が構築されることとなり、主なる神様が「律法」を与えた意図とは、少しずれてしまうのです。

さて、本日の福音書は、「ヨハネによる福音書」にある復活の物語です。イエス様の十字架刑の後、弟子たちはユダヤ人を恐れて、理性的な判断に基づいて、家に鍵をかけて閉じこもっていました。その家にイエス様は不思議な形で入ってきました。そして「**あなたがたに平和があるように**」と三度も語りかけます（ヨハネ 20：19、21、26）。それは単なる挨拶にとどまらず、理性的な判断を超えた平和とは何かを、弟子たちに示されたといえます。しかし、この物語の中で、もっとも理性的な判断をした登場人物は、トマスでしょう。復活したイエス様に出会った弟子たちにそのことを告げられたにもかかわらず、自分が実際に出会って、手で触れて確かめないと信じないと語ったからです。死んだ人の復活、理性的に考えてありえない、だからこそ、実際に自分が確認、あるいは実証しないと信じない。ある意味でトマスは今日でいう実証科学的な判断をもしているといえます。そのようなトマスに対してイエス様は、自分にふれなさいと語りかけます。そして「**わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである**」（ヨハネ 20：29）とさらに語りかけるのです。「見ないで信じる」、イエス様は、ご自分の体をお示しになりましたので、見ることの大切さを決して否定していませんが、理性を超えて信じることの大切さがより大切であることを示されたのです。

ヨハネ福音書が書かれた時代は、イエス様に出会った人はもうすべて天に召されていきました。イエス様に出会った人に会った、という人もすべて天に召されていたと思います。いわば、イエス様について、人間的な確証が何もない時代に入っていたといえます。そのような状況の中でこの物語は、トマスを通して、触れることができるイエス様の姿を示します。それは復活したイエス様が今も生きておられるのは、確実なことなのだを示しています。そして、だから、見ないでも信じていこうと語るのです。そして、そう信じる時、ヨハネによる福音書にあるイエス様の姿一つひとつから、希望と力を与えられるのです。

その希望は、イエス様の復活という、理性を超えた事柄に基づいています。私たちと同じ人間としての死、しかし、それを超えた復活という出来事に基づいています。だからこそ、私たちにとって、まことに希望に他ならないのです。私たちが生きている現代世界で、どのような悲しみがあったとしても、理性的判断では、絶望しかないと思えても、希望は無くならないのです。復活に基づいて示される希望を、これからもご一緒に信じて歩んでいきたいと思えます。